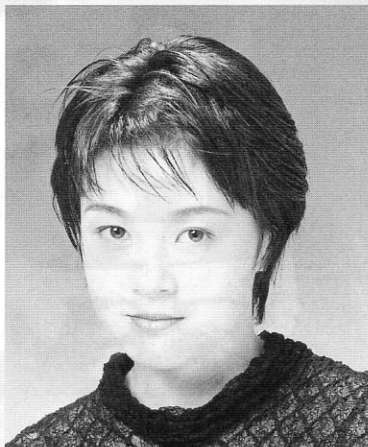


阿部 百合子



〔出身〕群馬県
〔経歴〕俳優座養成所6期
劇団俳優座一九五七年入団
〔主な出演作品〕
〔舞台〕
「三人姉妹」(俳優座)
「十二夜」(俳優座)
「肥前松浦女人塚」(俳優座)
「門一わが愛」(俳優座)
「華やかなる鬼女たちの宴」(俳優座)
「別荘の人々」(俳優座)
「貴族の階段」(俳優座)
「アメリカの時計」(俳優座)
「心一わが愛」(俳優座)
「聖母の戦きありや神無月」(俳優座)
「とりあえずの死」(俳優座)
「遅咲きの花のワルツ」(俳優座)
「戦争とは」(稽古場朗読)
「三角関係」(三越劇場)
「ジェニーの肖像」(国際青少年演劇センター)
「原子野」(国際青少年演劇センター)
「武士の旗」(岡部企画)

松尾 あぐり



〔出身〕埼玉県
〔経歴〕前進座
〔主な出演作品〕
〔舞台〕
「平家女護島」(前進座)
「怒る富士」(前進座)
「風花の峠」(新歌舞伎座)
「蛭」(前進座)
「遠山の金さん」(前進座)
「赤ひげ」(前進座)
「ベニスの商人」(前進座)
「たいごんどん」(前進座)
「女狐」(岡部企画)
「東京ナインガールズ」(岡部企画)

精霊流し

舞台は一九八〇年八月十五日の九州肥前松浦。夕暮れ。東京で不倫のすえ、恋に破れた「女」が死に場所を求めて故郷へ戻ってくる。自殺未遂で收容される古びた旅館が舞台。旅館を営む「おはば」は、終戦の日の八月十五日、不義の子を死なせた思い出に生きていく。
「女」と「おはば」の間で、それぞれの思いをこめたモノローグすれすれの会話が交わされ、「女」は次第に生きる力を取り戻していく…。

「印象的なセリフ。何度も上演されてしかるべき作品」
「いい劇だった。意気込みだけのことはあった。」
「これは生命の賛歌である」
「セリフに圧倒的な力 まざまざと残る印象」
一九八〇年読売新聞劇評
一九八二年毎日新聞劇評
一九九二年赤旗新聞投稿
一九九四年京都新聞劇評

「精霊流し」は、日本の男とその時代を描くことを得意とする岡部耕大が、小劇場運動が盛んだった一九八〇年に発表した女性一人だけの作品です。すでに初演で「印象的なセリフ。何度も上演されてしかるべき作品」と読売新聞の劇評で絶賛されましたように、その透き徹った夕闇から黄昏の風景をバックに女性一人だけの紡ぎ出すような台詞の数々は演劇評論家衛紀生氏をして「演劇史に残る、とうても名作です」といわしめた作品です。

台詞が持つイメージの劇世界。本来、「演劇は言葉の芸術であったのだ」と頷かせるに十分な内容です。それは、作・演出の岡部耕大もいうように、火のように激しい女の情念をうちに秘めながらも、淡々と自殺未遂の若い女性に自らの戦争体験と苦い過去を笑いながら語り「それでも生きるのだ」という「おはば」は、この時代に生きていく人達の胸の奥の奥までも迫り、力強く生きると励まします。日本人は、今こそ人間の時代を取り戻さなければ取り返しのつかないことになるのではないのでしょうか。

演劇は人間と人間との出会いを生みます。小劇場運動が盛んだった最中に、敢えて逆らうように上演されたこの人間ドラマが、「もう一度人間の時代に還れ」ともいうように、静かに浮上しました。すでに各地で再演が重ねられ絶賛されてきました。

今、日本人は静かにはありますが、それでもどこか激しく「人間でありたい」と切望しているのかもしれない。上演された各地での観客の反応がそれを如実に教えてくれます。ピアノが奏でる童謡のメロディーで幕が開く「一幕物の夏芝居は、その瞬間から咳払いや物音つない静かな闇の世界が訪れるのです。「おはば」と「女」の絶妙の会話に笑い泣き、それでもだれもが透き徹った八月十五日の夕暮れの風景に身を委ね、そこに誘われるのです。それはすでに戦後の日本人の原風景があるかつてのよう。名作といわれる所以です。

風雲見マンシヨ

岡部企画プロデュース 39 岡部企画・紀伊國屋書店提携
岡部耕大書き下ろし

大海賊と天正遣欧少年使節

「南蛮には絢爛豪華な

見果てぬ夢の国がある！」

10/9(土) 13(日) 新宿紀伊國屋ホール

企画・制作 岡部企画

TEL.044-933-9754
〒214-0031 神奈川県川崎市多摩区東生田1-12-7
URL http://www.3.plala.or.jp/koudai/
e-mail ko@llac.plala.or.jp